生徒会の十六夜～碧陽学園中等部生徒会議事録～

東堂　西奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の十六夜～碧陽学園中等部生徒会議事録～

【Ｎコード】

Ｎ４６５２Ｙ

【作者名】

東堂　西奈

【あらすじ】

ここは、あの有名な碧陽学園・・・の中等部である。そこで行われる議事録とは、いかに?!

～生徒会の人物紹介～

「人生はいつも自分が主役なんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

・・・。人生か。確かに、いつでも自分が主役と言っていいだろう。宿命も運命も、自分で切り開かなければ、何も始まらない。なんだか、今日の会長は、いつも以上に心に残ることを―

「ということで、私の写真集を作成します！」

『えぇぇぇぇ？』

一斉ブーイングだ。さっきまでの時間を返せ！

あ、そういえば紹介が遅れていた。この人は、碧陽学園中等部生徒会会長である、『朱空（あけぞら）あかり』。３年生で、容姿・頭脳・家系など、本当に完璧な人間である。ただ、今回のような発言がしょっちゅうあるんだ。・・・そう。この人は、絶対的なナルシストだ。

で、俺は『白鐘斑都（しろがねはんと）』。副会長を務める２年生だ。まぁ、本当に普通だ。自分で言うんだから、相当なものだ。さて、とりあえず会長に向けて、

「あのー、会長？」

「ん？何？白鐘。文句でもあるんですか？」

「いやぁ、文句じゃないですけど、何で今回写真集を？」

「あー。そんな簡単な質問？？」

「悪かったですね、簡単で。」

「ならよしです。答えは・・・。」

「答えは？」

「私が美しいからです！」
「・・・。ですよねー。」
「はぁ。ハンター君。そのくだらない行稼ぎやめてよね。どうせ、これも小説でしょ？」
「ちっ、ばれたか。いーじゃねーか。別に。」
「ウチの身にもなって考えてよね。ね、会長？」
「えぇ。青葉の言うとおりです。」

この口出ししてきた奴は、『指籠青葉（さしごもりあおば）』ここの書記であり、俺の幼馴染だ。なんていうか・・・。んー。ツンデレ？長い髪を一つにまとめ、会議のときだけ伊達メガネをつけてる。たまに、幼馴染に見えなくなるくらい、大人っぽい。ただ、若干ウザイ。

まぁ、ここの生徒会は今現在、５人で活動中である。今回、紹介が長いのも気にしないで欲しい。システムとしては、高校のほうと同じで、人気投票で行われる。優良枠は、２，３年前まであったらしいが、今は義務教育にはふさわしくないということで中止されている。じゃあ、何でこの俺がここにいるかというと、いまいちよくわからんのだ。なんだかんだ、青葉も会長と話を合わせている。少しめんどくさくなったんで、耳だけ傾けて、とりあえず雑務に没頭しよう。

んと、まずは部費のことか。
えっと、野球部がボール増や「だから、主役は僕だけだって！」「うわ、桃先輩！急に入りすぎ！」「え？何の話？」「あら、桃じゃない。」してほしいだって？「やっほお。今何してるの？」「だから、落ち着いたら？先輩。」「あれ、青葉？敬語。」「う、そこつく・・・ついてきますかっ！」「ならよし。」「すいませーん、遅れましたー。」まったく、こっちも大「あ、葵ー！待ってたんだぞ！」「ふぇ？」「さて、皆さん揃ったところで、今日の会議の内容

は、」「写真集だって！会長の」「あぁもお！何で言うんです！」「あかり、まためんどくさいこと言って・・・。」変なんだから・・・。「葵、帰ろっか。」「え？いまきたばっかだよ？」「桃は黙ってて！」

「うるさぁぁぁああああああああああああああああああああああい！！！！！」

「「「「あれ、いたの？」」」」

「いましたよ！？扱いひどくね？！」
なんなんだろう、これ。おれ、真面目に仕事してたよね？なんで、こんな仕打ち受けるの？

「あ、ハンター君。桃たちの分の紹介もよろしくー」

この人は、『葉戸櫻蘭（はとさくら）』。３年生で、副会長してる。見ての通り、テンションが以上に高い。見た目も、金髪で碧眼だ。確か、お父さんがイタリア？だった気がする。・・・え？何で桃って呼ばれてるかって？本人曰く、名前がはとさくら↓はーとさくら↓ハート桜色で桃らしい。

で、こっちのなんだかよくわからないのが、『綾水葵（あやみあおい）』。会計で、本当に何考えているのかわかんない。この間も、真剣な会議の途中で「煮卵！」と叫んでた。本人にも自覚はあったらしく、あのことを言うと、顔を赤らめる。いわゆる天然だ。

以上、このメンバーで活動している。

脱線しすぎた会議もここでようやく本題に入った。まぁ、俺の扱いはもういいや。悲しくなんてないからな！

「で、皆揃ったはいいですけど、何のため・・・いや、やっぱいいｄす。」
「あら、そう？」
うん。写真集のことについては今回は無視という方向で！俺の思いを察知した青葉も続けて、
「できれば、やめたら？」
「てゆうか、あかり、何で急に？」
「あ、青いもそう思ってましたぁ。」
「よく聞いてくれました！」
「やるんだ・・・。」
青葉、頑張れ。何でこの２人は、聞いちゃうんだろう。無限ループ来るぞ、これ。
「それは、今回私の美貌を世間に曝してそのお金で古くなった【ピロリロリン】を新しくするんです！」
「あ、ごめん、電話だ。すいませんちょい抜けますね。」
「「「ハンター君（先輩）！！」」」
「えぇ？！何で？！」
「早く行きなさい。さて、そこで皆さんにはどうするかイメージを考えてもらいます。」

何でみんな怒っていたんだろう？あ、ヤバイ、早く出なきゃ。「もしもーし」生徒会室のドアを開けつつ、俺は通話先の相手へ、返事を返す。・・・。会長の今回の考えは、本当いい物だった。だって。

つづく

～生徒会の人物紹介～（後書き）

いかがでしたか？
このままつぎへとつなげます。
この話はざっとした人物紹介でした

～生徒会、ブレインストーミングする。～（前書き）

題名がねたばれでごめんんさい。

～生徒会、ブレインストーミングする。～

「ちりも積もれば山となるはずなんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

ハンター君が電話で外に出ているため、（ハンター君とは、副会長白鐘斑都（しろがねはんと）・ウチの幼馴染）貴重な語り部は、指籠青葉（さしごもりあおば）がやっている。とりあえず、今回の問題の発端である、朱空（あけおら）あかり会長に今回の名言の真意を尋ねてみる。

「会長。」

「ん？何でしょう、青葉。あ、それよりも皆さん、早く写真集の案を考えてください。」

見事にスルーだった。なのに、恐ろしいくらい話の要点が伝わってきた。簡単に言えば、どういう写真集にしたいか、らしい。そんなこと急に言われても。

ふと、そんな空気が漂う中、超天然な1年生会計綾水葵（あやみあおい）が口を開いた。

「いわゆる、ぶれいんすとぉみんぐですよね。」

「へぇ、葵、あんたそんな言葉知ってんだ。」

「お褒めいただき光栄です、桃先輩。じゃあ、早速行いましょう。」

この桃先輩と呼ばれた金髪碧眼の美少女は、葉戸櫻蘭（はとさくら）。3年生副会長だ。こんだけ自由すぎる見た目とは裏腹に、後輩は絶対敬語！を考えている。あ、「桃」というのはあだ名である。

それにしても、葵、ブレインストーミング知ってたんだ。ウチも、

話に参戦しようとした刹那、会長が

「ちょ、ちょっと待ってください！ブレインストーミングとは何ですの？！」

「え？会長知らないんですか？？」

「あかり、興味ないものは本当無関心だよね。少しは先輩たちが出してる小説読めば？」

「桃は黙ってて！」

あちゃ、会長さん怒っちゃった。桃先輩とアイコンタクトを取り、考えていると、葵が少しだけ手を上げていた。

「葵？」

せんえつながら、と言いつつ、ガタッといすから立ち上がり

「ブレインストーミングとは、集団でアイデアを出し合うことによって相互交錯の連鎖反応や発想の誘発を期待する技法である。人数に制限はないが5～7名、場合によっては１０名程度が好ましく議題は予め周知しておくべきである。また、この４原則を守る必要がある。判断・結論を出さない（結論厳禁）自由なアイデア抽出を制限するような、判断・結論は慎む。判断・結論は、ブレインストーミングの次の段階にゆずる。ただし可能性を広く抽出するための質問や意見ならば、その場で自由にぶつけ合う。たとえば「予算が足りない」と否定するのはこの段階では正し―。」

「「「もういい！！」」」

何なんだ、この子。こういう突飛でたところの知識はすごいんだ・・・。って、何ウチは感心しちゃってるんだ！実際、こんなの読む人いないだろ？！そう思っていると、ガラガラッと、生徒会室のドアが開いた。「あ、やっと来た！」あちゃ、声に出してしまった。

「すいません、遅れました。ついつい話し込んじゃって・・・。」
「全員揃ったところで、ブレインストーミング開始！」

「「応！」」

「くないが、「予算が足りないがどう対応するのかと可能性を広げる発言は歓迎される。粗野な考えを歓迎する（自由奔放）誰もが思いつきそうなアイデアよりも、奇抜な考え方やユニークで斬新なアイデアを重視する。新規性のある発明はたいてい最初は笑いものにされる事が多く、そういった提案こそを重視すること。量を重視する（質より量）様々な角度から、多くのアイデアを出す。一般的な考え方・アイデアはもちろん、一般的でなく新規性のある考え方・アイデアまであらゆる提案を歓迎する。アイディアを結合し発展させる（結合改善）別々のアイデアをくっつけたり一部を変化させたりすることで、新たなアイデアを生み出していく。他人の意見に便乗することが推奨され―」←Ｗｉｋｉ参照

「葵ちゃん?！」

このあと、延々とブレインストーミングについて話していた葵を止めて、やっと話し合えた。・・・なんで写真集一つでこんなに話またぐんだろう・・・。

つづく

～生徒会、ブレインストーミングする。～（後書き）

なぜかのまたはなしまたぎ?!

次はようやく話し合い・・・。

先は長いですがお付き合いいただけたら、と思います

～生徒会、会議する。～（前書き）

やっとだｗｗ

ここで一応ひと段落です。

頑張りました。

～生徒会、会議する。～

「どんな物でも磨けば輝くんです！」

会長が、いつものように背伸びをして何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

どんな物でも、か。最近美術でなんかサビらせて、表札を作ったけど、あれも確かに磨くと光ってた。

物に限らず、人だってそうだ。テレビに出ている女優さんも、有名なモデルさんも。見た目は普通かもしれないが華やかな衣装で着飾っている。その辺の一般人でもまたしかり。ファッションにこだわってても、ん？っていう人もいるし、地味だが、かわいらしい人だって。そう思えば、今回の会長の名言も━

「さあ、ブレインストーミングしてください！」

「やっぱそうなるよな・・・」

「ん？どうかしました？」

「いえ、なんでも・・・」

・・・いや、分かってはいたよ？こうなることは。う、嘘じゃないんだからねっ！・・・。何がしたかったんだろう、俺。

まぁ、しかし、朱空（あけぞら）あかり会長の言うことは突飛でてるが、これまでも流れからだと、理解しやすい。俺がそんなことを思っていると、「はぁ」と嘆息する声が聞こえた。俺だけ聞こえたらしく、他のメンバーは考え込んでいる。

仕方ないから俺は、息を漏らした張本人、青葉と小声で会議をする。

「（つっても、このメンバーで可能か？）」

「（ああ、無理だ。だから今日あの名言なんだろう）」
「（こんな奴らでも話せばいい意見が出てくるってか）」
「（だろうな）」

こいつはおれと同じ2年だ。幼馴染。あ、こいつのセリフは上の方な。話してると、青葉も考えはないらしい。よかった。考えなんかあったらおかしくて仕方がない。
小声で会議をしていた俺たちのことに気づいたらしく（聞こえたらしく）、会長がこっちに目を向けてきた。

「あら、何かいい意見はできましたか？」
「ああ、いや、俺らはなんも。なあ、青━」

青葉に同意を求めた。求める必要はないが、一応だ。ほら、よく石橋はつっこんでから。なんて言うじゃないか。あれ？言わないのか、今の中学生は。なんて浸っていると、青葉の表情が変わっていった。

「はい！会長さんが猛獣と戯れるのがいいと思います！」
「「「えええええ？！」」」
「青葉・・・。なんなんだそれ」
「ん？なんか言った？」

指籠青葉（さしごもりあおば）、１４年くらいの付き合いだが、めんどくさいな・・・。はあ。まあでも、こういうことがこの会議に必要なんだ。理由さえよければ、大丈夫。

「青葉、何で猛獣なんだ？」
「え？会長さんが可愛いからだよ？」
「へ、へえ。猫とかじゃダメなのか？」

「あぁ、うーん、ちょっとムリかな」
「え？なんで？可愛いじゃん」
「だからだよ。でも会長のほうが可愛いから猫が可哀相でしょ？」

いや、待て。それもどうかと思うぞ？！
おれは心の中で突っ込みつつ、なんとなくここの空気がふわぁっとしてしまっていたのを感じ、誰もが思っていたことを冷徹に話す。
隣で桃先輩が「何か、ヤバイ」的なことを言っていたのは気のせいだ。うん。あ、桃というのはあだ名で、本名は葉戸櫻蘭（はとさくら）。３年生である。
準備が整ったところで、掛けてもいないメガネをくいっとあげる仕草をし、言い放つ。

「失礼ですがお嬢様」
「何よ影――――――じゃない、ハンター君」
「ひょっとしてお嬢様は百――――」
「百合ですよね、青葉先輩って」
「葵ぃいいいい！！」
「ふぇ？」

あ。言っちゃったよ、この子。くそっ。ここからがオチだっていうのに！そこ分かっていただきたい！普通ならスベるのを見越して待つもんだろ？！
この空気の読めない奴は綾水葵（あやみあおい）。度が越えた天然である。周りも、やっちまった、という感じに硬直している。
俺はこうしてしまった張本人として、何とか状況を打破しようと試みる。

「葵？」
「はい。何か悪いことでもしましたか、私」

「自覚なしか」
「何言ってるかわかりませんので、すいません」

撃沈だった。生徒会中から、哀れむような視線が刺さる。・・・これは人を殺せるぞ？まじで。もう泣きたい。青葉があせった様子でまあまあと慰めてくれる。・・・待てよ。

「青葉あああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」
「えっ？！なんだよ？」
「よく考えたらお前のせいじゃねえか！」
「うん。そうだね」
「だよな。ははっ」
「ははっ。ばっかだな」
「ちょっと待ちなさい！」
「「会長？」」
「結局猛獣と戯れるのはどうなったんですか？！」
「あ、うん。桃も聞きたいとこだった」

意外な展開キタ――――――（゜∀゜）――――――！！！！！　どうすればいいんだ？
ここでざっと今の状況を。猛獣と戯れる写真集→青葉の百合発覚→葵が意味不明発言。だな。なんだこれ。会長と先輩ナイスだな。考えてたら、

「葵、猛獣はヤです」
「ええ。私もです」
「桃もー」
「考えてみたらダメだね」

こいつら。あ、言っとくけど、俺後輩だぜ？５割の人の。でも、さ。皆に聞くけど。
切れていい一線はあると思うんだ。ね？
「ｔｒｊｃｆｖヒュｃｘｊｒｆｃｇｊｆｖｂｃでｘせｒｄｆｇふぇｄｘｋヴぃうび」
―気が付けば俺はそこからの記憶がない。葵が泣きながら新しい提案をしていたので、話をそっちに切り替える。にしても、葵は何で泣いているんだろう？うーん、会長が無茶振りでもしたのだろうか。そうに違いないな。きっとそうだ。
で、と俺は切り出す。葵は若干びくつきながらおもむろに答えてくれた。・・・本当どうしたんだろう？気になる・・・。

「あ、葵は、コッ、コスプレがいいと・・・」
コスプレか。恐ろしいほどまともな意見がやっと来て、逆に怖い。俺的には大賛成だな。あ、まともだから、ってことでな？
とはいえ、絶対の権限は会長にある。青葉や桃先輩もめんどくさくなってきていたみたいで、「さんせー」と口々に言っている。
まぁ、普通ならこれで決まりでいいのだが、この会長は曲者だからな。自分主義。ナルシスト。コスプレなんか嫌に違いない。とりあえず、かたちだけでも多数決にして早く終わらせたかった俺が喋ろうとすると、会長が泣きながら放った。
「コスプレ！いいですね！一回やりたかったんですよ・・・」
・・・けってい。
今日の会議は終了。はぁ。何でこんな意見に３話も使ったんだろう・・・。もったいなさ過ぎた。明日はコスプレか。大変だが、『本当の理由』のためだと思えば、楽になれる。

このときの俺は、まだあの悲しみを知るよしもなかった。それは
また、次の話で。

つづく

～生徒会、会議する。～（後書き）

次からはもっと亀になりますが、温かく見守ってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4652y/

生徒会の十六夜～碧陽学園中等部生徒会議事録～

2011年11月27日22時58分発行